

はじめに 疫病と日本文学——千年の表現史を追う

日比 嘉高

迫り来る「ころり」

「真木廻家」という号をもつ江戸の町人の身近に、ひたひたとコレラの足音が迫っていた。身内が亡くなる。悔やみに出かければ、コレラの話で持ちきりである。真木廻家はそこで数多くの病の噂話を聞き、そのあとまわった床屋でも、さらにそれを上回る膨大な量の噂を聞く。気をつけねばならない。真木廻家は、足の脛や指の間に灸を据えて用心する。死者を弔うため、火葬場へ行った。聞きしに勝る死者の多さである。真木廻家は、そのようなすを驚愕とともに見聞記録に書き付けた。「葬式の棺桶、何れの火屋にも門内より裏の方に至るまで、山の如く積重ね」うんぬん。「前代未聞の儀」であることよと、彼は述懐している。幕末の江戸を襲った「ころり」コレラのありさまである（本書、塩村論）。

令和二年（二〇二〇）に始まった新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、私たちの生活や感

覺にとつて大きな転換点となるかもしれない。何が起こつており、この先の世界はどうなつていくのだろう。それを考える際に、かつて同じような疫病の流行が起こつたとき、人々は何を考え、感じ、どう処したのかを振り返ることは有用である。本書は、日本文学の描いた疫病と、その渦中に生きた人々のようすを、中古から現代に至る千年のスパンで見渡す試みである。

心をもつ病

中世において病は、心を持つていた。それは神や鬼の姿、あるいは童や虫の姿を取つて現れた。彼らは、しばしば政治的敗北の恨みなどをもつていとされた。あるいは、病者に取り憑きながらも葉を怖れるといった感情をもつていることがうかがわれた。心をもつてることによつて、彼らと人間との間で一定のコミュニケーションが生まれる。なぜ中世の人々は、人と対話可能な存在として、病を描き出したのだろうか。中根千絵は、得体の知れなさから来る不安から人々を解き放とうとしたからだったと推定する（中根論）。たしかに、たとえ鬼や虫が恐ろしく不気味であつたとしても、何もわからないよりは、それが視覚化され、会話を交わせれば、少しはましになるだろう。心をもつ病という表象は、そうした安心のための方便だつたわけだ。

その一方、病の正体が政治的敗者の怨霊——当然ここでも病は心をもつ——だとみなされたときに

は、様相は少し異なる。伴大納言や菅原道真などといった行疫神、御霊は、敗者の恨みというその属性ゆえに、権力を握る政治的勝者に対立する構えをとる者の拠りどころとなりうる。病が行疫神によってもたらされていると噂されるとき、その怒りを鎮めようと祀りを行うとすれば、その祀りは権力者の失政をとがめ、政治的な不満を晴らさんとする抵抗的な意味を帯びることになる。

対話可能な心をもつ疫鬼か、恨みに荒ぶる疫神か。中世の表現世界において、病はその両面があるとし唆されていた。酒吞童子などの鬼を論じた高木信もまた、鬼と人間との相同性を言い、鬼は人が自分たちの生活空間を保つていくために必要とした「悪」だったのだと指摘する（高木論）。病をめぐる両義性は、近本謙介の指摘するところでもある。『日本書紀』『今昔物語集』において、神は除疫・防疫を行う者であると同時に、疫病をもたらす者であった（近本、コラム）。アンビバレントな病の神や鬼、虫たちは、人間が疫病と共に生きていくために生み出した一つの知恵だった。

さて、千年の時を経て、「虫」は令和二年（二〇二〇）のパンデミック小説にも現れた（日比論）。原因不明の疫病の結果現れた「虫」は、ここでは感染者自身の別名となっている。小林エリカの短編「脱皮」の向こうに、今述べた中世の「虫」のありさまを重ね合わせてみよう。中世の表象では、「虫」は人間とは別種の存在であり恐ろしいものだが、一方で心を持ち、対話可能な存在であった。これに対し、現代の表象において、「虫」は「感染した人間」自身である。D A P P I という略称をもつその病は、伝染するらしく、しかし原因も感染経路も治療法もわからず、罹患者から言葉と思考を奪い

去っていく。罹患した者は恐怖に駆られた人々によって社会から弾き出される。人を人ならざるものへ変えていく病。人を「虫」へと変えていく感染症。

対話可能な「虫」とは、共生できる。しかし対話不可能な「虫」とは、共生できない。対話可能な「虫」という表象は、「虫」をも含めた人の社会の包摂的な志向を示す。一方、対話不可能な「虫」という表象は、「虫」を排除する「健康」な人間たちの排他的な志向をあぶり出す。病をえた人が「虫」とみなされ、排除されていく酷薄な世界。

現実の私たちの世界でも、感染症と排外主義とが結びつけられ、特定の国や人種を攻撃の対象とするヘイト・スピーチ、ヘイト・クライムが、世界の各地で起こっている。近頃は、疫病と異国とを結びつける発想が、『日本書紀』の時代からあったと指摘する。変わらないのは、病なのか、私たち人間なのか。古典と対話し、あわせて現代の表現を読み込む作業は、私たちの「今」を照らし出す。

前近代と現代の対比をもう少し続けよう。疫病は人に災いをもたらし、人々の身体に変調を起し、大規模な流行ともなれば社会を変容しさえする。一方、大きな影響を及ぼす疫病の原因そのものは、人の目に見えない。現代であれば、「これがウイルスである」と拡大画像が示されるところだが、そのウイルスであっても実際に肉眼で見ることにはかなわない。まして前近代であれば、疫病の原因を目で見ることも望むべくもない。だが、人は見えないものを見えないからといって、放っておくことはない。病の原因が探され、理由が求められ、可視化が試みられる。疫神や疫鬼、虫などとい

う表象がそうして生まれる。

現代はどうだろうか。王冠や太陽の光冠に命名が由来するというコロナウイルスの図像は、もちろんそうした「理解」のためのアイコンの一つだ。高木信はさらに「数値」を加える。私たちは目に見えないウイルスをなんとか捉えたいと、必死で数字を見つめるのだ。日々、主要ニュースとして流され、人々の関心を集める各地域の感染者数。あるいは病床の逼迫率、実効再生産数、重症者数、そのほか様々な書き慣れない数値が今や日常のものとなった。だが私たちは、その数値に溺れてしまう傾向があるのではないか。死者の数を示す数値の向こうには、現実の一人の人間の、代替できない生の一つ一つがある。我々は「死者に対する、あるいは〈死〉に対する〈想像力〉を削り取られていること」に鈍感であってはならないと高木はいう（高木論）。跋扈する数値こそ、私たちを惑わせる現代の鬼なのだろうか。

パンデミックを描きとる

歌人の永田和宏は、コロナ禍の中、投稿される短歌の六〇七割がコロナに関するものになっていると述べている。一方コロナを題材とする俳句は、季感を重視するジャンルの特性からか、短歌ほどの多さにはなっていないと、藤田祐史は述べる（藤田論）。現代の人々は、各々の拠る文芸の特色に立

脚しながら、この未曾有の出来事を切り取ろうとしているようだ。

透明に仕切られてゐる薄暑かな

仁平勝

薄暑は、初夏のうつすらとした暑さという季語。作者の仁平は、これとアクリル板の仕切りを組み合わせた。むろん、コロナウイルス感染症の流行以後、客に対応するカウンターや、飲食店で頻繁に目にするようになった透明な仕切り板のことである。じわりと汗ばみ、肌にとまといつき始めた暑さが、透明なアクリル板によって仕切られている。アクリル板はさほど大きくはない。その周囲では連続した空気の連なりが、人と人をつないでいる。つないでいるが、しかし仕切られている。見えてはいるが、しかし隔てられている。「ソーシャル・デスタンス」と呼ばれる新しい距離のあり方。その空間の仕切り方、あるいはつなぎ方。この句は、空間的な区切りと連なり、視覚的な区切りと連なりを句の中で示しながら、薄暑という季節の中に、その季語が誘い出す身体的な感覚の中に、それを置いてみせる。この句が優れているのは、アクリル板という具体的なものを前提としながらも、「仕切られてゐる」感覚を、一枚のアクリル板の描写にとどまらない、パンデミック時代に広く行き渡った空間の表現、感覚の表現にまで高めているところだろう。

現代のパンデミックが出現させた、特異だが身近でもある感覚を、俳句は季語という集団的で息の長い言語芸術的蓄積を利用することで読み手と共有する。「コロナウイルスの狂騒に一对一で向き合

うのはしんどい」。だからこそ「古人・仲間の宿る「季」と共に今を感受するという俳句の流儀」が生きるのだ（藤田論）。

パンデミックが、ある特徴的な表現への欲求を特に呼び起こすということは、小説の場合においても見いだせる。たとえばそれは、「家族」についての語りの増殖として観察されると、飯田祐子は金原ひとみの小説を論じながら指摘する。人の発する飛沫に含まれるウイルスによって感染が起これると警告され、私たちはこれまで交わしてきた触れあいや対話をあきらめ、距離を置くようになった。マスクを着用することなく、人とじかに接することができなくなってしまった。その欠落を埋めるかのように、物語が起動する。「人と人とが触れ合うことが忌避される新しい社会には、人と人との繋がりを構成するナラティブが必要なのである」（飯田、コラム）。

今回のパンデミックにおいて、世界中で用いられた言い回しとして、「ウイルスとの闘い」「ウイルスとの戦争」というものがある。この言葉をめぐって、日本の作家古谷田奈月と中国の作家閻連科との間で、興味深い対比が見て取れる（尹芷汝、コラム）。そこでは「アウシュビッツ以後、詩を書くことは野蛮である」というアドルノの著名な言葉を下敷きとしながら、感染症に対処していく際に「戦争」を引き合いに出すべきなのかどうか焦点となっている。それぞれの作家にそれぞれの理路があり、そしてそれぞれの背景があつて、単純に白黒は付けられない。ウイルスは、人種も国籍も選ばない。病を描く文学も世界中で書かれている。そもそも日本文学に登場する疫神、疫鬼の表現の型は、

多く中国にその起源をもつ（中根論）。病の表象と、病に向き合うやりかたは、時代と文化を越える。一方、その国のローカルな状況が強い影を投げかける場合もある。

特徴的な表現が見て取れるのは、言語芸術だけではない。日本語そのものもまた興味深い変化の中にあると、宮地朝子は指摘する。新しい事態は、それを表現するための新しい言葉の誕生を促す。「対面〇〇」「オンライン〇〇」「三密」「コロナ禍」「アベノマスク」「濃厚接触」「不要不急」など、耳新しい言葉やその意味を変えた言葉は、いくらでも思い浮かぶ。それだけ、事態が急変し、言葉がそれを追いかけているのだ。古い言葉が新たな意味を付与されて新造語となる「レトロニム」が増加し、話し言葉／書き言葉に続く現代のコミュニケーションの第三の極たる「打ち言葉」——典型的にはSNSアプリやビジネスチャットアプリなどで交わされる、非対面かつ即時的な性格の日本語——の存在感が強まったことが観察できる。コンピュータ・テクノロジーの大波による日本語の変化が、パンデミックの中でさらに加速しているという言い方も可能だろう（宮地、コラム）。

二重写しの過去と現在

過去と現在の表現を照らし合わせながら読むことで浮上する、さまじまな想起や二重写しについても言及しておこう。コロナ禍の下で鬼を語るときに、誰しもが思い起こすのは「鬼滅の刃」だろう。

吾峠呼世晴ごとうげこよはるによる人気漫画は、テレビアニメとしてもアニメ映画としても記録的なヒット作となった。作中、鬼は人にその血を分け与えることで、人を鬼と化す。血が媒介する鬼の増殖が、ウイルスによる感染と重ね合わされることは、パンデミックの時代を生きる読者たちにとっては、むしろ自然だったかもしれない。島村輝は鬼の血とウイルスの近接性を指摘しつつ、さらに「鬼滅の刃」兄妹と宮沢賢治兄妹とを重ねるといふ跳躍を行う（島村論）。宮沢賢治や志賀直哉の描いた感染症流行下の大正時代が呼び起こされながら、大正と現代の差異と呼応が測られていく。

疫病に対応する政治家の姿もまた、過去と現在を対比する思考を誘う。西南戦争、日清戦争で兵たちのコレラ罹患と対峙した後藤新平の業績は、鶴見祐輔の史伝によって、生き生きと伝えられている（榊原千鶴、コラム）。「調査狂」と言われ記録を大切にすることの意義を説き、港での検疫の体制を整え、検疫所の係員の待遇改善を実行した後藤の活躍を見て、現代にも彼のような有能な政治家が出ぬものか——と考えないものはいないだろう。

遊びと病のからみあいについても、思わぬところから想起が生じる。光源氏には病や死と隣り合わせのイメージが漂うが、彼をはじめとした恋を求める若い貴公子たちの軽率な夜遊びが、病の罹患に結びつき物語を動かす動因となっていると大井田晴彦は指摘する（大井田論）。危険も顧みず夜の町へ出かける若者たちの奔放なあり方に、現代を思い起こしはしないだろうか——いや、現代には奔放な中高年もいるわけだから、この感想はフェアではあるまい。また大井田は唯一本書の中で、病を語ら

ないこと、の美意識を論じて興味深い。清少納言「枕草子」の「病は」の段は、饒舌に「胸。ものけ。脚の気。〔…〕もの食はれぬ心地」などについて語っていくが、決して「痘瘡」と「飲水病〔糖尿病〕」については語らない。どちらも美的ではないという判断があると同時に、この二つが彼女の仕えた中関白家の衰退の一因となったという強烈な記憶があったからだろうと大井田は論じているのである。

疫病を描く日本文学の歴史とは、人とその社会を窮地に陥れる得体の知れぬナニモノかを、知識と想像力と、そして少しの遊び心とによって理解し表現してきた、その連綿たる連鎖のことである。令和初年を生きる私たちは、世界的な感染症の大流行の中で深刻な社会の曲がり角に立っている。だが、そうした危機は、むしろたびたび人の世を襲ってきたということ、私たちは今に伝えられた数々の書物によって教えられる。そしてまた、今紡ぎ出されている感染症をめぐる新しい物語が、千年を超える連鎖の末端に先頭で、古くて新しい挑戦を続けているのだ、ということにも気づくだろう。人類の歴史から疫病が消える日は、当分来るまい。私たちは病と文学のバトンを、引き継ぎ、受け渡していく役割を担っているのである。

*

本書には論考七本、コラム五本を収めた。時代は現代から始まり、大きく二部に分けながら、おおむね過去へ遡っていく順に並べた。後半の部は、「あとがき」に書いたとおり、名古屋大学で行われたシンポジウムの記録でもある。通史のような体裁に見えるだろうが、むしろ疫病をめぐる日本文学

のスナップショット集として手に取ってもらおうとよいだろう。興味に従って、どの時代、どの章から読んでいただいてもかまわない。神と鬼と虫と人間が織りなす、深刻ではあるが、しかし興味の尽きない文芸の世界へ、ようこそ。